

①構成

① 第一段落（7節）

この段落では十二人の派遣が述べられるが、ここに使われた三つの動詞はそれぞれ時制が違っている。

「呼び寄せる」	現在
「始めた」	アオリスト
「与えていた」	未完了過去

② 第二段落（8―11節）

この段落はさらに二つに分けられる。

⑦ 「彼は命じた」で始まる8―9節では、「道のために」持参すべき持ち物についての指示が出される。ルカやマタイの並行記事と比較すると、条件は緩められているが、それでも杖とサンダルと一枚の下着以外は、持参が禁止されている。

⑧ 「彼は言っていた」で始まる10―11節では、宣教地に着いた後、彼らが受け入れられた場合と受け入れられなかった場合とについて、弟子たちの取るべき態度を指示している。

③ 第三段落（12―13節）

彼らは「出かけて、宣べ伝えた」で始まるこの段落はイエスの指示を弟子たちが実行したことを述べている。しかし、「宣べ伝えた」メッセージについては何も触れずに、ただその目的を述べて、「悔い改めるように」と書くだけであるのが、注意を引く。

② 十二人の派遣（7節）

① イエスの動作が時制の異なる三つの動詞によって描かれる。第一の「彼は呼び寄せる」は現在形である。これは、過去の出来事を現在形で表すことによって、この場面を生き生きと描写する手法である。「歴史的現在」と呼ばれ、マルコが好む表現法である。

② 第二の「彼は始めた」はアオリストという過去形である。「始めた」をアオリスト形にすることによって、それ以前とそれ以後の状態が明確に区別される。どのような区別が立てられたのか、それを知るために文脈に注目すると、4章ではたとえによって、また5章では奇跡を通して、神の国の現実がどのようなものであるかが示されていた。その段階での弟子たちは、神の国についてのイエスの教えを学んでいたにすぎず、いわば受身でしかなかったと言える。しかし、6章7節からは、弟子の教育が新たな段階に入り、みずから実地に神の国の現実を体験することになる。この新段階に入ったことが「始まった」というアオリスト形で表されている。

③ 第三の「与えていた」は未完了過去形である。この時制は反復される過去の動作を示すから、イエスが二人ずつ、別々に悪霊に対する権能を授けたことが暗示されている。

④ 未完了過去とアオリストはどちらもギリシア語の過去の動作を表す時制である。たとえば、「与えた」という過去の動作が、未完了形で表されると、「与える」という動作が繰り返されたり、習慣化した動作であったことが強調される。そこで、「与え続けた」とか「与えることにしていた」というニュアンスを持つことになる。

⑤ しかし、アオリスト形で表されると、動作が一つの全体として捉えられ、その動作が起こったことのみ重点が置かれる。従って、何かを「与えた」という動作があったと報告するだけ、その様相がどうであったかには触れないことになる。

④このような区別は原則であり、それぞれがどのようなニュアンスで使われていたかは、文脈によって判断しなければならないが、7節では時制の違いが意識されていると思われる。7節は、三つの動詞の時制を巧みに使い分けることによって、十二弟子を派遣する際の、イエスの細やかな配慮を描いている。

③イエスの指示（8—11節）

⑧8—9節では、宣教地への「道」で携えることのできる持ち物が述べられる。

⑦強調点は「なにも取ってはならない」ことにある。喜捨を受ける献金袋を指すと思われる「袋」も、「帯の中の銅貨」ですら携帯が許されない。許されたのは杖だけである。サンダルを履くことと一枚の下着を着ることが許されるが、予備を持つことは許されない。

⑥並行記事（マタ107やルカ92）と比較すると、マタイやルカではメッセージの内容が「天の国が近づいたこと」とか「神の国について」と明示されているが、マルコではそれが欠けている。マルコがそれに触れなかったのは、何も持たない十二人の姿そのものが神の国の到来のしるしとなるからである。彼らが何も持たずに宣教に出てゆくことによって、それが神の国の到来を示す象徴行動となる。

⑤10—11節では、宣教地に入ったときに取るべき態度を教えている。

⑦受け入れられ、家に招き入れられたとき、より快適な場所を求めて渡り歩いてはならない。宣教者の使命は神の国を、身をもって表すことであって、快い歓待を求めることではない。

⑥宣教者が受け入れられないときには、「足の下の塵をふるい落としなさい」と指示される。足の塵を払うのは、ユダヤ人が異邦人の地から故国へと足を踏み入れるときの習慣であった。受け入れられなかった宣教者がその町を去るとき、塵を払うのは、宣教を受け入れなかったその地は、異邦の地となったことを示すためである。

⑤塵を払うことの目的が「彼らへの証しのために」と述べられ、塵を払うのは彼らの不信仰を証すためだとされる。しかし、不信仰を示すしるしであっても、二重の意味が込められている。一つには抗議の動作として塵を払うのであり、もう一つには一刻も早い悔い改めを求めて塵を払う。

④受け入れられる（デコマイ）

⑦文字通りには「受け入れる」を意味し、人物に使われるときは「誰かを迎える・歓迎する」の意味で、手厚くもてなすことを表す。もてなしを受ける人物は、十二人をはじめとして（マコ611、マタ1014・40、ルカ95）、七十二人（ルカ18・10）、イエス（ルカ953、ヨハ445）、テトス（2コリ715）、パウロ（ガラ414）といった福音宣教者であることが多い。

⑥そのときに、この語は「宣教者の使信を受け入れる」という意味をも含んでいる。だから、イエスから派遣され、彼の代理人となって働く弟子たちや使徒を受け入れることは、イエスが宣べ伝える福音とイエス自身を受け入れることに等しい。こうした意味合いがよくうかがえる用例は、マタ10章40節「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである」である。十二人を受け入れることはイエスを受け入れ、さらにイエスを遣わした神を受け入れることでもある。

④弟子たちの実行（12—13節）

④「悔い改める」と「宣べ伝える」という動詞の組み合わせは、1章14―15節でも、神の国の到来を告げる際に用いられていた。ここでも弟子たちが宣べ伝えるメッセージは神の国の到来である。しかし、ここでは何も持たずに出かけ、快適さを求めずに、必要な人のために働く彼らの姿そのもののうちに、神の国は到来している、と考えられているのだろう。

⑤十二人（ドージェカ）

①福音書では、女性の出血が続いた期間（マコ五25と並行箇所）、いやされた少女の年齢（マコ五42と並行箇所）、パン屑が集められた籠の数（マコ六43と並行箇所）がいずれも「十二」である。イエスの年齢（ルカ二42）、神が遣わす天使の軍団の数にも「十二」が使われる（マタ二六53）。

②しかし、福音書で重要なのは、「イエスの十二人の弟子」を表す用例である（マコ六7）。イエスは自らに付き従う数多くの弟子たち（マコ三15）の中から、特に十二人の弟子を選び出して、宣教に派遣する。この十二人の弟子の一人一人の名前は、マコ3章16節と並行箇所に列挙されており、ドージェカはそこで名前が列挙された十二人のメンバーからなる弟子の集団を表す。その場合、福音書のギリシア語原文で、ドージェカはマタイ10章1・2節などの例外を除けば、「弟子（マセータース）」という単語を伴わず、単独で使われ「十二人の弟子」を表している。

③この十二人は、イエスのそばに付き従い、行動を共にする。弟子の「十二」という数が、イスラエルの部族数「十二」と一致しているのは偶然ではない。たとえば、マタイ19章28節、ルカ22章30節では、十二人の弟子が「イスラエルの十二部族」に結び付けられ、「新しいイスラエル」を体現する集団として扱われている。その意味で、「十二」は、イエスと行動を共にする弟子の人数を正確に反映する数というよりは、むしろ神の民を表す言葉であり、神の救いの完成を象徴する数である。

④このことを踏まえるなら、十二人が他の弟子たちから区別され、彼らだけが悪霊を支配するほどの権威を与えられ（マコ六7）、宣教に向く理由が分かる。十二人は、この世を救うためにイエスを介して遣わされた神の使者であり、彼らの働きを通して、神は地上に自分の存在を知らせ、その救いをもたらす。「十二人」の活動は、神の国の到来のしるしである。

⑤そのため、ユダの裏切りによって欠員が生じた十二人に、ルカはマテアを加えて「十二」という数を回復させる（使一26）。1コリント15章5節で、パウロは復活のキリストが十二人に現れたと書くが、そこでも「十二」は弟子の人数というよりは、新しいイスラエルを象徴する数となっている。

⑥道のために何も取らない

①マルコは、何も持たずに神に信頼して出かける弟子たちの姿を通して、神の国の現実を描き出す。宣教のために持ち物を準備する暇もないほどに、神の国は差し迫っている。神の国に直面して一刻も早い悔い改めを宣教する緊急さが表されている。

②しかし、物を持たないのはそれだけの理由ではない。むしろ神の支配の確かさを、身をもって示す象徴行動だと考えたほうがよいかもしれない。神の国は言葉ではなく、行動によって示されなければならない。弟子たちは、神の国が接近していることを示すために、何も持たずに宣教に出る。そうすることによって、彼らは身をもって神の働きを体験し、同時に神の国の現実を人々に示す。イエスによる十二弟子への指示と、それを実行する彼らの姿を通して、神の国の現実が示される。